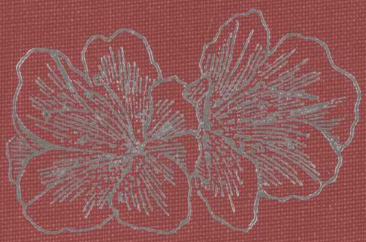

吉屋信子全集 10

鬼火

吉屋信子全集 10
鬼火　香取夫人の生涯
定価　二七〇〇円
昭和五十年十一月十五日発行
著者　吉屋信子
装幀者　中島かほる
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　清美堂製本株式会社
発行所　朝日新聞社　東京・大阪・名古屋・北九州

©1975 C. YOSHIYA 0393-240190-0042

第十巻　目次

短　篇――鬼火ほか――　3
香取夫人の生涯　443
あとがき　573

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

短篇

——鬼火ほか（昭和二十二年～昭和四十年）——

目次

呉須の柘榴　9
海潮音　18
麻雀　53
外交官　66
かげろふ　77
みおつくし　95
花の詐欺師　105
生霊　115
鶴　133
鬼火　145
手毬唄　150

茶　盌　173
父の果　182
凍　蝶　193
二世の母　203
嫗の幻想　241
もう一人の私　251
宴　会　261
見合旅行　272
かくれんぼ　289
後家サロン　297
嫉　妬　308
晩春の騒ぎ　317
蕃社の落日　328

西太后の壺 342
夏手袋 361
ブラジルの蝶 368
マカオの露台 391
誰かが私に似ている 406
井戸の底 418
海幻譚 426

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

呉須の柘榴

柘榴の実と葉の一枝を白磁に染め付けた厚手の掌にここちよい持ち重みの程よい、煎茶茶碗にも番茶の色にもよい茶碗だった。

小盆ほどもたっぷりと大きい、漆黒の茶托のまんなかに、それが静かに糸底を沈ませて、現われた時、章子はひとの客間で、あとではずかしくなるほど感嘆した。

「いいわねえ！　このお茶碗、どうしましょう」

なんでも、こんな言葉を臆面もなく言い放って、ひとかど陶器がわかるみたいな感動のしぐさで、その茶碗をてのひらに載せて撫で廻したり眼高に持ち上げてみたりした。

――そんなことを初めて人前でしたほど、章子はその茶碗が気に入ったのだった。それが果して陶器として立派なものか、どうかは別として、いわば章子自身の主観で、その茶碗は好きに、たいへん気に入ったのである。章子のものを選ぶときは、いつもそれに依った。それが時には大笑いのこともあった。

その日も、いわばそういう心もとない章子の褒めちぎった、その家の茶碗ではあったが、だが、章子は自分がそれを好きという一点では、仰山に言えば、みじんもゆるぎのない真実だった。

純黒のつやつやした、寛闊な大振りな円い茶托の上にすっぽりと生え抜いたように、まっ白にくっきりと、浮き出た白地の茶碗のまるみといい、その白に藍の濃淡に染め付けられた、あおえの柘榴の模様、見据えるとかなしいばかりに青々と濡れて浸み入る呉須の色だった。窯を出て使い出されての相当の年月は、新しい陶器が最初余分に持てあましている、釉薬の光沢をじりじりと消しとって、やんわりとおだやかな底を引き締めた味わい深いつやに落ちつき澄んでいる。

「私、これ大好き！」

章子はいつまでも、茶碗から眼を離さなかった。

その当時、まだものの豊富だった時代――そのころの客の接待のならわしで、日本茶の出されたあと、紅茶が運ばれた。

その紅茶茶碗のつまらなさは、なまじっか前の染付の茶碗があまりにきわ立った美しさからだった。紅茶茶碗と引き替えに女中がさげてゆく、青柘榴の茶碗を章子は名残惜しく見送って寂しいおもいだった。

やがて、その客間での用談が終って、章子は玄関へ立った。そこの広い上り框の横に長方型の小箱が紐をかけてハトロン紙に包まれて置いてあった。

その家の奥さんが、少しはにかんだように、

「さきほどのお茶碗がたいそうお気に召したようでございますから、使いふるしで失礼ではございますが、どうぞ」

その框の横にさりげなく用意されてあったのは、それを納めたものだったのだ。章子はまったく伏兵に不意を打たれた形で、ひどくまごつきあかくなった。あの客間で茶碗に向かった自分の眼に執着の鬼が宿っていたので、ついにこうせねばならなくさせたのか……。

たとえ、そうであろうともと、章子は素直にそれを受け取った。

「けっして、御心配なく、私どもも是非差し上げたくなったのでございますから」

そう言う奥さん――五つの児の母で二十七、八のそのひとが、或る感動のもとに人によいものを与えようと決心したイキの美しさに見えた。

章子は、その小箱の包を抱えて、その邸の門を出るなり、その頃たやすく乗れた自動車を自分の家へ走らせた。途中ぐずぐずしているとその茶碗の小箱が消えてなくなりそうな気がしたのだった。

家のうちへ飛び込むようにした彼女は、C子に、茶碗を貰ったという報告を、世にも美しい物語のように、せかせかと早口に告げた。

だがC子は冷静に、

「そうでしょう、貴女の褒め方ったら、そりゃあしつっこいんですもの、そのうえ、いつでもへんなものばかり褒めるのよ」

章子は包の紐を解くのも、もどかしく開いて、呉須茶碗五客入りの桐の小箱の蓋を取った。月見草のしぼんだ花の色のように、濃ゆい鬱金の切れに一つ一つ包まれたのが、五つ、その最初の一つが現われた時、C子が、

「まあ！　ほんとにこれいいわ――よく下すったわねえ」

と驚かされ、次に、

「丁寧に御礼おっしゃった？」

と、家庭教師のような顔をした。

――その翌日、ふたりは日本橋の有名な漆器店へ行った。あの茶碗の為に、あの邸の客間で出されたと同じ、漆黒の大型の茶托を探す為だった。どんな茶托よりも、やっぱりああした茶托が一番ぴったりと、その茶碗を美しく生かすのを知ったからである。章子の家の幾つかの茶托のどれも、その茶碗に負けるからだった。

目的の店では、望み通りのはなかった。もう支那との戦いが始っている年月が続き、そろそろそうしたものの品数が減っていたせいだった。ほかの店や百貨店ものぞいても見当らず、とうとう蠟色塗の濃ゆい、大きさもややあれに準じたので我慢することになった。

その茶碗は、章子の家でみだりに客の前に出されなかった。いったいこの家の厨の流し元では、いつも大事なものだけ割れる、そして割れても欺かずにすむ粗末なものは、いつまでも割れず倦きるほど残るのだった。この家の厨女は（美しきもののもろくも滅びやすい）感傷を主に味わわせるように、綺麗な皿小鉢をよく割った。

C子は、呉須柘榴の茶碗は自分で洗い扱っていた。それはその茶碗を惜しみなく章子に贈った奥さんへの心づくしでもあった。

この貴重な茶碗は時たま客の前に姿を現わした。或る日、C子は厨でこの茶碗を洗いながら、

「あのひと、このお茶碗折角出したのに褒めないのよ」

と言ったりした。

章子のように、毎月せかせかと仕事をせず、一年に二つ三つだけの仕事を仕上げ、あとは気の利いたおしゃれ雑誌をつくったりしているUさんが訪れたとき、むろんこの茶碗は出ていった。

「まあ、いいものあるのねえ、あなたのうち、これC子さんみつけたんでしょう、どこで買って？」

爪紅をきれいにさした指先で、青絵の茶碗は撫でられていた。

章子がいい気持になって、買ったのでなく、貰った話をすると、（うん）（ええ）などとうなずいていたUさんは、

「じゃあ、私がいまこれをせっせと褒めたら、帰りにはどうなるかしら」

と笑わせるのだった。

太平洋戦を日本が始めて三年目頃には、章子も、その他のたいていの人たちも仕事が出来なくなっていた。それを機会に章子は東京から鎌倉へ近距離の疎開めいた事をした。その当時トラックは拝むように頼んで一台動かすのもたいへんだった。牛込の棲居に大半の家具を残して、やっと身の廻りのもの日常品だけ積んで運んだのが、せい一杯だった。その荷のほかにC子たちが手で運んだものの中に呉須の柘榴の茶碗の小箱が入っていた。

その翌年の早春の東京の最初の大きな戦禍の夜、家具の大半を置いて人に貸して来た牛込の家はぺろりと灰になった。こうしていろいろものを失った章子の鎌倉の家では、もう呉須の柘榴の茶碗も誰彼の差別なく来客ごとに出されねばならなかった。やがてやっと終戦となり、章子の机に向かう日も復活すると、いちどにどっと仕事にぶつかったせいか、今年の梅雨の頃、かつて病らったことのある胆石という胆嚢に結晶の生じる憂いも復活したらしく、その用心に常備の薬をのんだりして章子は念を入れていちにち臥床していた。

その日の午後――だった。不思議な訪問客が現われた。

C子が枕許に来て、けげんそうに、しかもきょとんとして、告げた。

「（蒲団）のモデルってひとが来て、会いたいんですって、

そのひと知ってらっしゃる？」
「えっ！（ふとん）のモデル！」
章子は吃驚――して起き上った。
（蒲団）――それは自然主義代表作品として有名で、章子も読んで知っていた。その作者のT・K、故人となった文豪の名と一緒に結びつけて記憶していた。
その作中の主人公は作者自身で、女主人公は作者の家庭に寄食していた女学生、その若い女性をすでに妻子ある作者が恋して苦しむ――ハウプトマンの戯曲（寂しき人々）のヨハンネスがアンナに生き甲斐を求めて止まなかったように――だがその女学生には他に意中の青年があり、その いきさつから、作者の家庭を去ってゆく、恋を失った主人公、つまり作者は、女学生が寄寓中起臥に使った彼女の――夜着の襟の天鵞絨の際立って汚れて居るのに顔を押附けて、心ゆくばかりなつかしい女の匂を嗅いだ――こんな行文がその作品の結びだったと思い出した。
その作品のモデルと名乗って来たからには、それは言うまでもなく、その作中の女学生だったひとのはずだ。その小説こそ読んで知ってはいるが、そのモデルには、いまだ一面識もあるわけがなかった。
「そのひとが、なんでここへ、なんの用で？」
章子は呆気に取られた。
「鎌倉へ来たけど、休むところがないから、しばらく休ませて貰いたいって……」
C子も少々、それこそ狐につままれたような顔つきをした。
「へえ……」
章子はただ感嘆した。
「どんな風なひと？」
C子は、耳の傍へ寄り、小さい声で、少しおかしげに、
「年齢とった抗日女性みたいなひと――でも聡しげよ」
と言った。その風采形容のあとに付け加えたことばには、C子の人柄の温かさがこもっていた。
「離屋で休んで貰ったら」
ここに疎開後居ついた手狭な家うちでは、せめてその四畳半なら気楽に休んで貰えるようだったから。
C子はこの珍客を庭の離屋へ案内して戻り、
「貴女に会いたいんですって――少し工合が悪くて寝ていますとは言ったけれど……」
「そうねえ、知らん顔してちゃ悪いわね、別に大病ってわけじゃないから」
多少おっくうで気が重いのを克服して、章子は着替をして、庭石を渡って離屋へ向かった。
軒に藤棚が連なり、花の後の藤豆を覆うてかぶさるように茂り、幾筋もの蔓はなおも虚空にのびている、その下の曇り日の翳影のさす離屋の濡縁に、そのひとはまだ上にあがらず腰かけたままだった。
白髪を半ばまじえた、少し赤味を帯びた髪の毛は、短か

目の断髪で、ウェーブもなくべっとりと小さい頭に柔かく撫でつけた上に茶色の髪網をかぶせ、小さい顔はなにか雀色の感じで、そばかすもしみも小皺も過ぎ去った多くの風雪に曝され、はるばる越え来った船の帆布のひとひらを思わせた。

だが眼鏡の奥にのぞくこれも小さい眼は、その二つが、このひとがどんな意味にもせよ智的な人間の段階に属していることを証しする燈火のようだった。C子が――でも聡しげよと言い加えたのは、それゆえであったろう。

それにもまして、C子の、一脈のおかしみを悪意なく含んで表現した（抗日女性みたいな風采――）は、言い得て妙だと、そのひとのなり形を見た瞬間、章子は微笑ましかった。

痩せたひょろ高い身に、オリーブ色の毛織の細い女洋袴、その裾に茶革の高い踵の靴、足は小さかった。上半身は濃茶のスエーター、いつか日支事変の以前、中華民国を旅行した時、或る市街のごみごみした胡同のほとりで、章子たち日本人の一行にじろりと国家的反感といいたい気持の眼を向けたその国の女性――その姿の綿の入って円筒にふくらんだ褲子が、いまオリーブ色の女洋袴に紛ろうて、日本を憎悪せずにいられなかったのも考える能力のせいと思われる、あのときのあの国の女の眼の釣り上って小さく縦かった聡しげなのも、いまありありと思い出されたほど、そのひとは、ちょっと日本人離れした、しかし東洋の女の感じだった。

初対面の挨拶というほどもなく簡単なお辞儀のあとで、そのひとはすぐ言い出した。

「今日、高浜虚子先生のお宅へ行くつもりで、道を問いましたらね、ここへ来る途中の生薬屋で、貴女も鎌倉にいられると教えてくれたものですから来ました」

これは唐突で、章子には解しかねた。かつての（蒲団）のモデルの文学女学生は、その後俳句を……。

「虚子先生は、いま小諸ですけれど」

と、章子が言うと、

「あ、そうですか」

と、ひとごとのように、けろりとする。いったい、どこの生薬屋が何をどう教えたのであろう。

「私はね、昔、処女作を虚子が認めて、ホトトギスへ発表してやると言ってくれたんですがね、T（蒲団の作者）が、やきもちを焼いて、今しばらく待て自分の手で発表してやると言ったので、とうとうそのままになったんです。そんなことから、今日も虚子先生のお宅へ伺ってみようと思ったんですがね」

章子は少し腑に落ちた、だが、それなら何故このひとはその足でここへ向かったのか。話を交しながら、どこか通じかねる異邦人の感じだった。

「私は、ロスアンゼルスに居た時、日本の婦人雑誌で貴女のことをよく知っていましたから」

同じこんなことを言って、数年前シャアトルから十八年振りで帰国した、以前たくさん作品を書いた有名だったT・Tさんが、突然章子の家――今は形のないあの牛込の家を訪問したのを思い出した。T・Tさんはその後中国に渡り、終戦前上海で客死したのだった。そのT・Tさんは東京ッ子で、はがゆいほど、どこかおひきずりの点もあったが、奥様型の色白のふっくらとした感じのひとだった。いまも眼の前のそのひととは、あらゆる印象が大きな開きをもった対照（コントラスト）である。

「アメリカではT・Tさんを御存じでしたか」

「あっちで話には聞いてました、いちども会ったことはありません、私も十五年米国にいました、戦争前の年に帰って来てしまったんです」

そういうひとの脇に大きなふくらんだリュックサックがどしんと置いてあるのだった。

「私も米国へ行く前、日本で少女小説などを書いていました、少女雑誌にも毎月――そのときはNという名で」

章子はその少女雑誌の読者の時期を持っていた。だからいまNという名を聞いたとき「ああ！」と小さく叫ぶほどだった――その少女雑誌にその頃（アリス物語）という翻案の少女小説が連載されていた記憶が、少女期に吸い取った活字の印象の根強さで消えなかった。でも、そのいまだに残る記憶に従えば、そのNは同じNでも、N・Sという男の作者の名だったはずである。

「（アリス物語）というのを覚えていますが、それはN・Sという名で――」

「ああ、N・Sは私の良人なんでした。あれは私が書いたものです。私はその頃N・Mでした」

では、あの少女小説によってこの人の良人の名を記憶にとどめていた章子だった。

「N・Sさんはいま？」

「死にました」

実に、颯爽とした歯切れのよい言葉だった。

「私はロスアンゼルスで結婚していまHという姓です」

章子は、このひとの口から出る断片的のこういう言葉をつなぎ合せて、このひとが自然主義文学期に文学を志してT・Kの許に寄って以来、自分の情熱や意慾に従って、奔放自在の道を描き尽して今日に及んだ過去を、おぼろげながら推察した。

そういう生き方をしたひとと、章子自身とは、まったく糸一筋結びつく縁のないへだたりを感じた。

子供の頃から、葉書一枚ポストに入れても、ぽとんとポストの底に落ちる音をたしかめねば気のすまなかった章子だった。長じて自分の仕事から一銭五厘の収入があれば、五厘は後日の為に蓄えた。家を出て二、三丁歩いてからでも、座敷に置いて来た灰皿に吸殻のけむっていたような気がすると、息せき引き返して裏口の塀の外からでも、家人にそれを告げて用心させて、ほっとしてまた歩き出してゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com